

特別養護老人ホーム(特養)の待機者が入所条件の厳格化で大幅に減少する裏で、金銭的、精神的な負担を抱えて在宅介護を続ける家族の苦しみは置き去りにされたままだ。行政の動きを待ちきれず、寄付による

【1面に本記】

特養待機、厳格化で4割減

介護の家族置き去り

「待機者数は減っても多くの家族の苦しみは変わらな

い。これでは介護詐欺だ」

金沢市の田畑吉広さん(66)

は、認知症で要介護2の母ソトさん(90)を見つめながら大きなため息をついた。田畑さんは同居するソトさんを1人で介護している。

要介護1以上なら入所できた8年前から両親の特養入所を申し込んでいるが、今もかなわない。

▽「自分が壊れる」

認知症が進んで徘徊をするようになった要介護4の父徳次さん(91)は今年1月、1人で小規模多機能型居宅介護施設に入所した。

母は父と面会するたびに「徳次さんと一緒にいたい」と切々と訴える。父と同じ施設に入れてあげたいが、費用が高く2人が入るのは難しい。特養なら可能だが、入居条件が要介護3以上になったことで、さらに門戸は狭まった。

田畑さんは、昨年5月に妻をがんで亡くした。ソトさんに食事を用意するようになったが「まずい」と口をひけて

「苦しみ変わらず、詐欺だ」

くれない。1日3回、汚物がついた洋服やシーツを洗濯することも。ストレスで眠れなくなり、睡眠導入剤を飲んでいる。家族による介護殺人のニュースが人ごとには思えない。「自分が壊れてしまいそうな瞬間がある」

▽募金1億円超

盛岡市では、市民の手で受け皿をつくる動きもある。岩手県の特養待機者は4406人。2538人は早期入所が必要な高齢者で、ニーズに施設整備が追いつかない。

2011年に医療関係者が募金で特養開設を目指すための会を設立。これを機に、地元の医療生活協同組合が中心となって発足した社会福祉法人が特養の事業主体となり、18年3月に100床での開設を見据える。

15年10月に始めた寄付の目標額は約1億9千万円で、約1億4千万円が集まった。企業だけでなく「施設ができればありがたい」と高齢者から数千円単位の寄付も。家族から入所の相談も毎日のように寄せられる。

市民の手で開設の動きも

担当者は「高齢者や家族が特養を切望していることを痛感した。低所得でも利用できる施設を目指したい」と話す。

▽「はし」外し

政府は膨らみ続ける介護保険財政に危機感を抱く。14年度の介護サービス費用は9兆5887億円で、制度が始まった00年度の2・6倍だった。

一般的に、要介護1と2は、歩行や身の回りのことは手助けがあればできることが多いとされる。このため、政府は軽度者については、施設より費用がかからない在宅介護に重点を置く方針だ。だが、現在、軽度者向けの在宅サービス縮小が議論され、利用者や家族からは「はし」が外されると批判の声も上がる。

「渋谷介護サポートセンター」の服部万里子事務局長は「軽度でも、認知症の場合は高齢の配偶者や仕事を持つ家族に大きな負担がかかり、疲弊している。そうした人こそ本来なら特養で受け入れるべきなのに、行き場がなくなっている」と批判する。